

声に出して読みましょう。

負傷した線路と月

おがわみめい
小川未明

レールが、町から村へ、村から平原へ、そして、山の間へと走っていました。

そこは、町をはなれてから、幾十マイルとなくきたところでした。ある日のこと、汽車が重い荷物や、たくさんな人間を乗せて過ぎていきましたときに、レールのある部分に傷がついたのであります。

レールは、痛みに堪えられませんでした。そして泣いていました。自分ほど、不運なものがあるだろうか。毎日、毎日、幾たびとなしに、重い汽罐車に頭の上を踏まれなければならない。汽罐車は、それをば平気に思っている。そればかりでなく、太陽が、身を焼くほど、強く照らしつける。日蔭にはいろうとあせっても自由に動くことができない。太い釘が自分の体をまくら木にしっかりと打ちつけている。考えてみると、いったい自分の体というものはどうなるのであろうか……と、レールは、思って泣いていました。

「どうなさったのですか？」と、そばに咲いていた、うす紅色をしたなでしこの花が、はじらうように頭をかしげてくださいました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

いつも、この花は、なぐさめてくれるのであります。こういうわ
 て、レールはうれしく思いました。

「いえ、さっき、汽罐車きかんしゃが、傷きずをつけていったのです。たいした傷きず
 《きず》ではありませんけれども、私は、身の上みうへを考かんがえてつくづ
 く悲かなしくなりました。それで泣ないていたのです。」と、レールは、答こた
 えしました。

「まあ、そうでしたか……。あなたのような、強つよい方かたがお泣なきなさ
 るのは、よくよくのことでございましょう。私わたしどもだったら、どう
 なってしまったかしのれない。そういえば、さっきたくさんの材木せいぼくと、
 米こめだらと、石炭せきたんと、なにかの箱はこを、いっぱい貨車かしゃに積つんでいきま
 した。そして、今日きょうは客車きやくしゃもいつもより長ながかったようでござい
 ました。山やまのあちらには、海うみがあり、また、温泉おんせんなどもありますか
 ら、そこへいく人ひとたちでにぎわっていたのでしよう。それにしても、
 あなたの傷きずが、たいしたことがありませんで、ようございましたこ
 と。」と、花はなは、しんせつにいいました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

レールは、きらきらと光る顔を花の方に向けて、

「やさしいあなたが、私をなぐさめてくださるので、どれほど、

私は、うれしく思っているでしょう。あなたが、すぐ近くで咲か

ない時分はどんなに、私は、さびしかったでしょう……。」「と、日

ごろは、いたって強く黙っていて、辛抱しているレールは、つい

涙ぐましい気持ちになりました。

すると、うす紅色をした花は、いいました。

「しかし、私の命もそう長くはありません。このあつさで、私

の体は、弱っています。長いこと雨が降らないのですもの。」「と、

歎いたのでした。

このとき、風が、レールの上をかすめて、花を揺すっていったの

であります。

レールは、耳をすましながら、

「夕立がやってきそうですよ。遠方で雷が鳴っています。それ

は、あなたの耳には、はいりますまい。ずっと遠くでありますから。

けれど私どもは、こうして長く、つづいていますので、その音が

伝わって聞こえてくるのです。」「といい

ました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

花は風に吹かれながら、

「ほんとうでしょうか。そうであれば、どれほど私わたしはうれしいかし
れませんか。」と答えました。

このとき、花を吹いている風が良かったです。

「ほんとうですよ。今日は、こちらも降るでしょう。もうすこしたつ
と、雲がぐんぐん押し寄せてきて、あの太陽の光を隠してしま
いますから。」と、知らしてくれました。

レールは、熱くなった体を、早く水に浴びて冷したいと思
いました。また、花は、早く、水を吸って死にそうな渴きをば、いや
したいと思いました。

しばらくすると、はたして、黒い雲や、灰色の雲がぐんぐんと
あちからから押し寄せてまいりました。そして、青々としていた空を
しだいに征服して、いつしか太陽の光すら、まったくさえぎって
しまったのです。

焼けるように、赤くいろどられていた野は、急に涼しく、うす
暗くかげったのでした。その時分から雷の音は、だんだん大き
く近づいてきたのでした。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

レールも花も、声をたてずに、ものすごくくなった空の模様をなが
 めていました。雨がとうとう降ってきたのであります。雨《あめ》
 は花に降りそそぎました。また、レールの上に降りかかりました。
 そしてレールの熱くなった体を冷やして、その傷痕を洗ってや
 りながら、「まあ、かわいそうに……。」と、雨はいいました。
 レールは、涙ぐみながら、雨に向かって、今日、冷酷な汽罐車
 に傷つけられたこと、太陽が、これまでというものは、毎日、毎日、
 用捨なく、頭から照りつけたことなどを話しました。すると雨は、
 とういいました。

「それは、お気の毒なことです。私はあつくなくなっていたあなたの
 体をひやしてあげました。私たちはもうじきにここを去らなけれ
 ばなりません。その後にはきっと月が出るであります。月は、
 太陽とはまったく気性がちがっています。そして、万物の運命を
 つかさどる力は、いまこそ太陽のようになくても、昔は、えら
 かったものだそうです。そのことを月に向かってお話下さい。月
 は、あなたが訴えなされたら、けっして悪いように取りはからい
 はしなかりうと思えます……。」と、雨は静かな調子でさとしてく
 れました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

はたしてほどなく雲が去り、そして降っていた雨は晴れてしま
 ました。あとには、すがすがしい夕空が青々と水のたたえられた
 ように澄んで見えました。

その夜、平原を照らした月は、いつも見る月よりは清らかで、
 その光のうちには、慈悲の輝きを含んでいました。やさしい花
 は、雨にぬれたままうなだれて、早くから眠ってしまい、そしてそ
 の葉蔭のあたりから、虫の泣く声の流れていました。

去っていった雨は月にささやいてでもいったものか、月が、この
 平原を照らしたときは、まずレールの上に、その姿を映しました。
 レールは、月に向かって、今日、自分を傷つけていった汽罐車があ
 ったことを告げたのであります。

「どんな汽罐車であるかしれないけれど、そんなことをしてしらぬ
 顔をしているとは冷酷な汽罐車である。私がいつて不心得をさ
 としてやるから、もし見覚えがあったら聞かさない。」と、月は
 いきました。

レールは、汽罐車の番号を教えま
 した。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

つき 月は、さっそく、まち 村へ、むら 村から山の 間へというふう
 ちから 力のおよぶかぎり、レールの告げた汽罐車をさがして歩いたので
 つき す。ちょうどその時分、鉄橋の上を走っている汽車がありました。
 つき 月はその汽罐車ではないかと飛び下りてみましたが、番号がちが
 っていました。

つき 月は海岸という海岸、野原という野原をさがしてまわりました。
 そして、いたるところに汽車が走っているのを認めました。貨車は
 かりのもあれば、また客車に貨車がまじっていたのもありました。
 かいがん 海岸では海水浴をしている人間もありました。彼らは、「ほんと
 つきよ うに、いい月夜だこと。」といって、砂浜でねころんだり、また暗
 なみ なか およ い波の中を泳いだりしていました。客車の窓からは、人々が
 あたま だ うみ けしき 頭を出して、海の景色をながめながら、笑ったり、話したりして
 いました。

しかし、この汽車の汽罐車も、月のたずねている番号ではありま
 せんでした。こうしてほとんど同じ時刻に、地上をたくさん
 はし が走っていましたが、レールのいった汽罐車は、トンネルの中へで
 つき もはいつていたものか、つい月の目にと
 まりませんでした。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

涼しい一夜を送って、レールは、もはや、昨日の苦痛を忘れてしまいましたが、約束をした月は翌日の夜も、レールを傷つけた汽罐車を探してまわったのでした。すると、ある停車場の構内に、ここからは、遠くへだたっている平原の中のレールから聞いた番号の汽罐車がじっとして休んでいました。

月は、さっそく、汽罐車の上へたどりつきました。そして、いつものように、静かな調子で、「どうして、そんなに、沈んで、じっとしているのだ。」と、いって、たずねました。

汽罐車は、月に、こういって話しかけると、はじめて、口を開きました。

「私はどんなに、疲れているか知りません。毎日、毎日、遠い道を走らせられるのです。そして昨日は、いままでない重い荷をつさせられていたので、一つの車輪を痛めてしまいました。私は、あの重い荷物と車室の中で、そんなことには無頓着に、笑ったり、話したりしていた人間が、憎らしくてしかたがありません。……。」と訴えたのであります。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「そんなら、おまえも、からだ体をいためたのか？」と、つき月は問いました。

「そうです。どこかでレールとすれ合あって、一つひとの車輪しゃりんを傷きずつけました。」と、きかんしゃ汽罐車は答こたえました。

つき月は、それを聞くと、だれが悪いわるということができなかつた。そして、レールを傷きずつけたきかんしゃ汽罐車をしかることもできなかつたのであります。

「その荷物にもつは、どこまで載のせていったんですか。」と、さらにつき月はききました。

「どこどこと行って一ひとところではありませんでした。大きな箱おほは、港みなとの駅えきまでつけていき、また石炭せきたんや木材もくざいは、ほかの町まちで降おろしました。」と、きかんしゃ汽罐車はいいました。

「どうぞ、お大事だいじに……。」と行って、つき月はこんどは、港みなとの方ほうへまわったのであります。すると、いま、きせん汽船が煙けむりをはいて出でようとしていました。その船ふねには、大きな箱おほがいくつも載のせられてありました。ふね月は、さっそく、船ふねの上うへへやってきて、箱ばこを照てらしたのであります。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「これからどこへいくのですか。」と、月はたずねました。箱は、黙だまつて、物思いに沈しずんでいましたが、

わたし
「私たちは、どこへやられるのかわかりません。故郷こきょうを出てから、
なが あいだきしや の ひろびろ うみ
長い間 汽車に載せられました。そして、いまこの広々とした海の
うえ ただよ
上をあてもなく漂ただよっているのをみると心細こころほそくなるのでありま

す。」と、箱は答えたのです。

つき
月は、そこで、いったいだれが悪いのかと考かんがえました。そこで、

こんどは、人間にんげんのようすを見とどけようと思おもいました。そして、街まちへ降りて、あたりを見まわしましたが、もうだいぶんおそかったと

みえて、みんな窓まどがしまっていました。一軒いっけん、二階にかいの窓まどがガラス戸どになっつぎているのがありましたので、月はそれからのぞきました。す

ると、そこには、かわいらしい赤ん坊あかぼがちょうど目めをさまして、月つきを見て喜よろこんで、笑わらっていたのであります。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒